
日常な非日常。

水無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常な非日常。

【Nコード】

N5264Z

【作者名】

水無月

【あらすじ】

入学初日から、生徒会と風紀委員のメンバーに目をつけられることとなった、黒主鴉紀。平凡で目立つことなく学校生活を送りたい。そんな望みはかなうのか。

はじまり・・・

「続いては、風紀委員からです。風紀委員長、かいんはやく架院隼人さん、副委員長、あかいしじん赤石迅さんお願いします。」

司会の男がそういうと会場が一斉にざわめく。

「かつこいい」

「やりてー」

「ちょーやべえー」

おいおい、ちょいちょい放送禁止用語が・・・

隼人と迅って言ったけ、そいつらがステージの上にあがると俺と同じ一年のやつらが危険な単語をぶちかます。

それもそのはず、今ステージの上にいる二人は眉目秀丽という言葉が似合いすぎるほど綺麗な顔だちをしている。そこまでは、いいけど・・・

なんで・・・なんで男が女子みたいな言動をするのか俺には理解できない。

「静かにしろ。」

シ————ン・・・

会場全体が静まりかえる。さつきとはちがい、一気に冷たい空気が漂う。

「風紀委員長、架院隼人だ。今から、守っておかなければならないことを言う。しっかり頭にたたきこんでおけ。」

きつい口調でそいつは言った。が俺には関係ない。どーせ、あいつともかかわることはないだろう。

「制服は着崩さない。チャラチャラしない。授業を抜け出さない。喧嘩しない。学校の評価をおとさない。以上、これらのことを守る

ように。守らないやつは俺が指導してやる。」

隼人は礼をするとステージをおりていく。

いやいや、今言ったこと一番守らなければいけないお前が守ってないとかそれはダメだろ。

それもそのはず、隼人はどっからどーみても、ヤンキーだ。うん、これはべつに守らなくてもなにも言われないだろう。

はじまり・・・（後書き）

へたくそですみません！！
温かく見守っていただけると幸いです。

はじまり・・・2

ステージの上に残された、迅はさわやかではない笑みを浮かべている、と思いきや、

「よーするにー、風紀を乱すなっってことだよねー。」

うん、説得力ねーな、この学校の風紀委員は、これなら別に裾だしたってピアスしたって何もいわれーな。 迅は、いかにもって感じの格好だ。 ピアスはしていないが髪は少し長めで赤紫って感じの色。 雰囲気はチャラチャラした感じ。

風紀委員なのにそんなんでいいのか？と思う。

そんなことを考えているうちに迅はステージをおりた。

「続いては、生徒会からです。 生徒会のみなさんお願いします。」

・・・。

「「「「いやあああああああああああああ！！」「」」」」

??????

なんだなんだなんだ？ 男のむさくるしい声が体育館にこだまする。

すっごく気持ち悪い。 鳥肌が・・・

俺は耳をふさぎながら周りを見る。 みんなステージの上に釘付けだ。 女子がおめえーらは。

そんなことを思いながら俺も前を見る。

うん。 意味がわかったよ。 おめえーらが騒ぐ理由が。

ステージの上にいるのは、美形、美形、美形、これまた美形。

くそ、この学校にはなぜこんなにも美形がそろっているのか・・・。

「俺たちが生徒会だ。」

美形の一人がそう言う。

「こんにちは。僕が生徒会の書記と会計をしているあかつきせんり曉千里です。よろしく願います。」

千里っていうやつは背が低く、目がくりくりしてて小動物みたいだ。
「やつぽー、みんな元気？副会長の遠矢拓人とやたくとだよー。盛り上がった
いこー。」

軽いかんじの拓人って人はチャラ男だな、ピアス多くね？

「最後に、俺が生徒会長の須藤瞬すどうしゅんだ。よろしく。」

うん。なんでこんなにもかっこいいやつあつまったのか不思議だ。

生徒会のメンバーは自己紹介だけするとステージを颯爽とおりていく。

挨拶だけでいいのか・・・ほかにやることあるんじゃないのか・・・
そうこうしてるうちにあっという間に入学式は終わった。

あとは、クラスでの自己紹介だけだ・・・。

こういうのは、はじめが肝心だ。この自己紹介でその先の俺の人生が決まると思っている。

大切に・・・平凡な人生を送るために・・・

成功させなければ・・・

はじまり・・・2（後書き）

つたない文章ですみません。

こんなものでよろしければどうぞこれからもよろしくお願いします。

はじまり・・・3

入学式がおわってみんな各々とクラスに向かう。ちなみに俺は11HRだ。

金持ち学園だけあって、体育館から教室までは結構ある。

特にやることがないから、後ろで会話してる男たちに耳をかたむける。

「いやー、ホントにかっこいいよなー、風紀委員と生徒会。おれ、副会長とやりてー。」

「俺は風紀委員長かなー。あの冷たい目で見られただけでいける。」

・・・

なるほどね、ここの学園はこんなやつしかいねーんだな。

そうか、なるほどね。ハハッ

そんなことを考えているうちに教室につく。

うん。広いね。すげーや。

なぜやりになつてきた俺は早く席に着きたくなつたから黒板に張つてある座席表を見る。

俺の席は・・・

「窓側の一番後ろか」

誰かとかぶった。

静かに後ろを向くとさっきステージの上にいた副会長がいた。ただど名前が分からない。

うーんと、えつと太郎？そんなダサくねーか・・・わっかんねーな。

「遠矢拓人。お前俺の名前分かんなかったの？」

「うん。」

「こんなにかっこいい俺を・・・」

「拓人君、どうしたの?？」

「千里ー。俺の名前を知らないやつがいたー。」

「ホントにー!? 誰? 見たい。」

だんだんめんどくさくなつたから、俺は自分の席についた。
そして眠りにつく。

足音が聞こえてくる。

「おい。おきろ。」

はじまり・・・3 (後書き)

へたくそですみません。

頑張りますのでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5264z/>

日常な非日常。

2011年12月25日17時49分発行